

# 古代建築の棟

## —平城宮大極殿の復原研究—

はじめに 現在、文化庁によって、大極殿の復原工事が進められている。その過程で瓦の葺き方についての再検討をおこなっているが、ひとつの問題点が棟の形式とその納まり関係である。現存する古代建築の屋根は後世の技法で葺き替えられており、現在伝わる伝統技法がどこまで古代技法を反映しているか判断は難しい。そこで、瓦葺建物の源流である中国の資料を含め、現存建物以外の資料にみられる棟に関する資料を収集し、古代建築の棟についての再検討をおこなった。棟には大棟、隅降棟、平降棟があるが、本稿ではそのうちの入母屋屋根および切妻屋根の平降棟の検討結果の概要を記す。

**中国・韓国の事例** 中国唐代以前の資料をみると、立体的なものとして建築形の明器（陶製の副葬品）や建築形の石棺、半立体的なものとして石窟等に彫られたレリーフ、平面的なものとして石窟の絵画や石などに刻まれた線刻絵画があり、なかにはかなり精緻に建物を模倣したものもあり、その時代の棟の形式を知ることができる。

資料を通観すると、棟は葺かれる方向の異なる瓦が接する部分を塞ぐ機能から発生したことが明白で、平降棟は切妻造における掛瓦の使用に伴い、地葺瓦と掛瓦間を塞ぐ機能として発生したものと考えられる。必然的に、切妻造の平降棟の先端は、掛瓦の掛かる軒先までとなる。前漢代の明器ですでに掛瓦の表現がみられ、端部の丸瓦がひとまわり大きく表現され、平降棟の発生を思わせる。後漢代以降の資料では、台形状に降棟が表現されるようになる。このとき、降棟はほぼ壁上に位置し、掛瓦を使用する長さがすなわち螻羽の長さとなる。

平降棟と丸瓦・平瓦の位置関係をみると、棟が平瓦を中心に据えられるものが多く、精緻につくられているものでは、明確に平瓦を中心に据えられている（図12）。中

国では、以上のような形式がほぼ現在の伝統様式にまで受け継がれている。

韓国の資料は少ないが、統一新羅中期の家形土器でも、ほぼ上記と同じ様相を示している。

**日本の事例** 7世紀に製作された玉虫厨子（図13）の切妻屋根部分では、妻壁上に平降棟が位置し、螻羽部分を掛瓦とし、平降棟は平瓦の中心に据えられ、掛瓦が平降棟の足元に納まり、中国の様相と一致している。東山遺跡出土瓦金堂（9世紀）は入母屋造で降棟は隅降棟の接点より下に延びずに、正面に鬼瓦を飾らない。これは機能上から必要最小限の形式で、入母屋屋根の平降棟に鬼瓦を使用しなかった事例の存在を示唆している。

これらの資料をみる限り、当初は中国で成立した形式を素直に受け入れたと考えられる。その後、螻羽が長くなり、平降棟の位置と妻壁との位置は関係なくなり、さらに野屋根の発達によって屋根端部での瓦の納まりに変化が生じるとともに、刀根丸瓦の使用などにより、平降棟は装飾的なものに変化する。ただし、その後も平降棟は平瓦を中心に据えられるのが定石となっている。

**大極殿の平降棟の位置** 平城宮出土の鬼瓦はいずれも足元中央に円弧状の線りを有し、丸瓦を跨ぐように平降棟の鬼瓦が据えられた（図14）とも考えられるが、上に示した流れから判断して、積極的には肯定しづらい。時代は降るが12世紀の『伴大納言絵詞』に描かれた朱雀門では、平瓦に乗るよう平降鬼瓦足元に丸の瓦当文様が表現されている。また、美濃国分寺出土鬼瓦のように足元中央に丸の瓦当をもったものがあり、図15に示したような納まりも考えられる。ただし、鬼瓦足元中央の線りの形式は一様でなく、今後詳細な検討が必要である。

**おわりに** 以上と同様に大棟や隅棟についても検討したが、その結果は別紙であらためておこなう。今後は、出土瓦を納まりの点から再検討し、古代の瓦葺技術をあきらかにしてゆく予定である。（島田敏男）

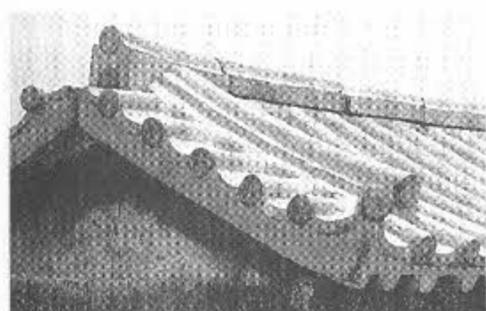


図12 寧懋石室（6世紀前半）  
ボストン美術館蔵



図13 玉虫厨子（7世紀）  
法隆寺蔵

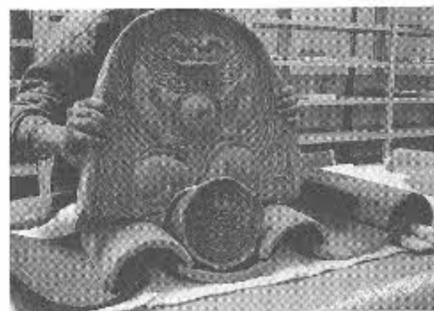
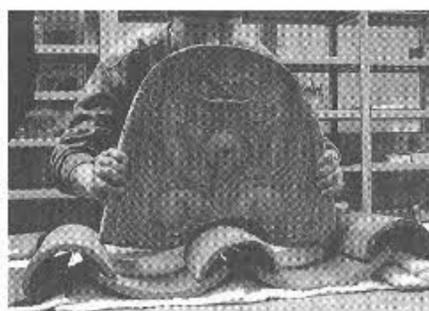


図14（左） 図15（右） 大極殿に使用されたと考えられる出土瓦で、丸瓦・平瓦・平降鬼瓦を組んだ様子